

没後 160 年記念 歌川国芳

憂き世に笑いと驚きを！

太田記念美術館(原宿) 前期 21. 09. 04～09. 26 後期 21. 10. 01～10. 24



「歌川国芳」(1797～1861)は江戸時代後期に活躍した浮世絵師で、10代後半にデビューして30代前半に描いた「つぞくすいこでんごうけつひやくはちにんのひとり通俗水滸伝豪傑百八人之一個」シリーズで大ブレイクし、以降は勇壮な武将を描いた武者絵、コミカルな笑いを描いた戯画、独自の魅力に溢れた風景画、美人画、役者絵、子供絵など、あらゆるジャンルを精力的に手掛け、数多くの弟子を育てて、当時の浮世絵界を牽引したことで知られている。

歌川国芳 みなもとらいこうやかたつちくもをなすようかいず《源頼光公館土蜘蛛作妖怪図》1843(天保14)年 大判錦絵三枚続



画伯の「風刺画」としてよく知られた一作で、病床に伏す「頼光」と宿宿(とめい)する四天王の姿を描いた作品は、この錦絵が出版されると背後に描かれた妖怪の謎解が大流行となったとされている。予想に反し

て図の評判が膨れ上がったために、処刑を恐れ版元は版木を処分したという。

歌川国芳《里すゞめねぐらの仮宿》1846(弘化3)年 大判錦絵三枚続



本図は、吉原が火災に遭遇した際に臨時の仮宅営業を報じたもので、天保の改革以降は「遊女絵」が禁じられていたために、「雀の擬人画」で当時の吉原の様子が描かれている。

題名の「里」は、遊里すなわち「吉原遊郭」のこと、「すゞめ」は「吉原すゞめ」という語から取ったもので「吉原に精通した人」、あるいは「吉原の冷やかしの客」、また「仮宿」は「仮宅」のことである。